

音楽の授業で高めるソーシャルスキル －主体的・協働的な活動を通して－

教職実践基礎領域
今井 彩那

I 主題設定の理由

1 今日の課題から

近年、学校現場においてはいじめや不登校の問題が増えてきている。その背景には、他者とのコミュニケーションをうまく取れない子どもたちの増加が指摘されている。これを解決するには、社会的な対人関係のスキルである「ソーシャルスキル」を高める教育を行うことが大切である。

2 連携協力校における課題意識から

連携協力校においても、自分と異なる意見をもつ友達に強く当たってしまったり、反対に自分の思ったことが言えずに思い悩んだりしている児童を見かける。どの学校においてもソーシャルスキルを高める必要性は同じであろう。しかし、同時に学校現場は教育課程が過密化しており、ソーシャルスキルを育てるための活動の特設するだけの時間が不足しているとも感じる。これをなんとか解決できないだろうかというのが筆者の課題意識である。

3 ソーシャルスキルを育てる上での音楽の可能性

一方で、私が専門とする音楽科においては、学習指導要領において「主体的・協働的に表現及び鑑賞の学習に取り組む」ことが内容として掲げられている。そして、このような活動を行うためには、対人関係を上手に営んでいくための技能である「ソーシャルスキル」が必要となる。

つまり、逆に言えば、よい音楽の授業をつくるためにソーシャルスキルが必要となるのであれば、むしろよい音楽の授業をつくる過程で一定のソーシャルスキルが育まれるのではないかと考えられる。このような考えのもと、本研究では、音楽の授業がソーシャルスキルを高める上でどのような役割を果たすのか、その可能性を模索することにした。

II 研究の目的

本研究の目的は、ソーシャルスキルの育成における音楽の可能性を明らかにすることである。そこで、まずは音楽の授業で養われるソーシャルスキルについて考えたい。

1 ソーシャルスキルとは

一般にソーシャルスキルは、対人関係や集団行動を上手に営んでいくための技能（スキル）とされるが、その定義は【表1】のように研究者によって様々である。

【表1】「さまざまな研究者によるソーシャルスキルの定義」⁽¹⁾

Riggio(1986)	基本的な、情報の発信と受信がソーシャルスキルの鍵である。認知的能力(対人的問題解決スキルなど)は付加的なもの。
Foster, Inderbitzen, & Nangle(1993)	ある特定の場面で、短期・長期的に、その子どもと周りの人間にとってポジティブな結果をもたらすと同時にネガティブな結果を最小にする行動
Darden & Ginter(1996)	「ソーシャルスキルのある人」=ある特定のスキルを持っていて、それらのスキルをどこでいつ使うかを知っている人
Segrin(1998)	他者と、適切な方法で効果的に接することを可能にするスキルや能力
相川(2005)	対人関係の目標を達成するために、言語的・非言語的な対人行動を適切かつ効果的に実行する能力

このように、ソーシャルスキルの定義が研究者によって異なる背景として、杉村ら(2007)は、「相川(2000)は3つの理由を挙げて説明している。第一に、ソーシャルスキルが包括的な概念であり、複雑で豊富な内容をもつこと(中略)第二に、異なる分野(例えば、教育学、医学、心理学)の研究者が異なる目的やコンテキストの中で研究を進めてきたこと(中略)そして第三には、ソーシャルスキルが他者との相互作用に関わるために、どのような場面を設定するか(例:初対面、対人葛藤を解決する場面)によっても定義が変わること」⁽¹⁾と述べている。

このように、ソーシャルスキルには幅広い解釈の仕方や研究者の立場、想定する場面の違いなどがあるので、音楽において身に付けることができるソーシャルスキルを考える上においては、これらの前提を十分に踏まえる必要がある。

2 学習指導要領より

新学習指導要領では、音楽科における目標に「生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる資質・能力」を育成することを掲げている。そして、学習指導要領解説には、これらを育成するために、「児童が、思いや意図をもって表現したり、音楽を味わって聴いたりする過程で、理解したり考えたりしたこと、音楽を豊かに表現できたこと、友達と音や音楽及び言葉によるコミュニケーションを図って交流し共有したり共感し

たりしたことなどが、自分の生活や自分たちを取り巻く社会とどのように関わり、また、どのような意味があるのかについて意識できるようにすることが大切である」と示されている。

また、「学びに向かう力、人間性等」の涵養に関する目標として、「主体的に（進んで）音楽に関わり、協働して音楽活動をする楽しさ」という言葉が全学年で示されている。そして、「協働して音楽活動する楽しさ」を、「音や音楽及び言葉によるコミュニケーションを図りながら、友達と音楽表現をしたり音楽を味わって聴いたりする楽しさなどである。」と説明している。

すなわち、音楽の授業では「音や音楽及び言葉によるコミュニケーション」が不可欠であり、友達と「音楽表現をしたり音楽を味わって聴いたり」「共有したり共感したり」する「主体的で協働的な音楽活動」が大切であると述べている。

このように学習指導要領においても、ソーシャルスキルの重要性が述べられており、音楽科の指導とソーシャルスキルの育成には密接な関係があることを読み取ることができる。

3 音楽とソーシャルスキルのかかわり

小島律子（1997）は、「子どもが何か楽器・音具をいじっているとき、そこから出る音を媒介に、他の子どもと関わる姿が見られる。そういうコミュニケーションの素朴な形の一つが『かけあい』である。（中略）さらに注目すべき点は、必ずしも仲の良い関係であっても、それでも子どもはかけあいを求める。（中略）コミュニケーションを拒否した相手であっても、子どもは、共有するものがあれば共有したほうが楽しいことを知っており、それを求めるものである。ここに、音楽というものがひとを結び付ける可能性をもつ存在であることが確認できる。」⁽²⁾と述べている。

また江口秀人（2001）は、「グルーブセッションによる音楽体験からは、協調性、思いやり、自己責任の感覚など、社会性の発達が見られます。一人ひとりの持ち味（個性）が明瞭に表われる音楽の場で、それぞれが仲間を尊重し、信頼しつつ、自分を表現するという経験は、たいへん貴重なものとなるのではないのでしょうか。」⁽³⁾と述べている。さらに、「アンサンブルにおいて呼吸を合わせるということは、心をつなぐということに他なりません。これは単にアンサンブルが上手になるというだけでなく、音楽を離れた部分でも、友だちの気持ちを察する、またはくみ取り理解してあげられる、ということなのです。」⁽⁴⁾とも述べている。

これらを整理すると、音楽には、人と人とを結びつける非言語的な側面も備わっており、ソーシャルスキルを高める要素が多い。また、仲間を信頼しつつ自分を表現するという音楽活動は社会性を育てるものであり、音楽活動にはソーシャルスキルを高める要

素が多分に含まれているということが言える。そして、これらの主張には、筆者も大いに共感するところである。

4 音楽で養われるソーシャルスキル

先に、ソーシャルスキルには幅広い解釈の仕方や研究者の立場、想定する場面の違いなどがあると述べたが、音楽の授業で養われるソーシャルスキルとは何だろうか。

音楽の授業は、既に一定の人間関係をもつ学級集団を対象とするものであるから、まず、想定する場面は、初対面や極度に緊張した場面ではなく、人間関係をさらに発展させようとするポジティブなものである。また、児童相互が共に成長する学校という場で行われるものであるから、その目的は自他の成長に資する教育的なものではなくてはならない。

さらに、音楽の特性を考える上で、非言語的な側面は欠かせない。先に相川（2005）のソーシャルスキルの定義を「対人関係の目標を達成するために、言語的・非言語的な対人行動を適切かつ効果的に実行する能力」と述べた。音楽における「非言語的な行動」とは、具体的には息を合わせることや、互いの音を聴き合いながら音量のバランスを考えることなどである。ここでは、周囲の状況に合わせながら自己を適切に表現することを求められており、多くのソーシャルスキルの定義に共通する、適度な自己主張と周囲への配慮という2つの要素を併せもつものである。

これを踏まえて、筆者は音楽科におけるソーシャルスキルを次のように定義した。

本研究における音楽で養うソーシャルスキルの定義

音楽の表現活動において、自己が表現したいイメージを大切にしながら友達の考えや思いも尊重し、ともにより豊かな表現活動に向かっていくための行動

5 先行実践

これまでにも、音楽にはソーシャルスキルを高める要素があることが指摘されてきたが、ソーシャルスキルに関わる具体的な研究は多くない。

後藤聡（2012）は「学びをつくる指導法の改善—音楽を中心とした協働学習の実践—」の中で、特別活動におけるソーシャルスキルトレーニングと音楽科における協同学習の実践を組み合わせを行い、子どもは一人で学ぶよりも協同で学ぶ方が、基礎的・基本的な知識や技能の習得が高まり、思考・判断・表現力を身に付けることを明らかにするとともに、協同学習をさせることでよりよい人間関係が構築され、学習効果が高まることを明らかにしている。このように、音楽活動を充実させるためにソーシャルスキルが必要であることは明らかではあるが、後藤のように特別活動と組み合わせた実践はあるものの、いずれも時間数の不足が課題とされている。

前項でまとめたように、音楽にはソーシャルスキルを高める要素は多くあり、授業者が適切な指導を行えば、音楽の授業内でソーシャルスキルを高めることは可能であると考えられる。そこで、本研究では上記の時間的不足を補うために、音楽の授業内でソーシャルスキルを高める実践を試みることを目的とした。

III 研究の構想

音楽の授業内でソーシャルスキルを高めると言っても、単に音楽の授業を充実させればよいというわけではない。ここでは、これまでの研究によりソーシャルスキルトレーニングに信頼性がある一般的なソーシャルスキルの手順を音楽の活動に当てはめていくことで、音楽の授業内でソーシャルスキルの向上を図ることを試みた。

1 一般的なソーシャルスキル育成の手順

ソーシャルスキルトレーニングでは、一般的に、教示、モデリング、リハーサル、フィードバック、般化の手順で行われる。具体的な内容については【表2】の通りである。

【表2】ソーシャルスキル育成の一般的な手順

教示	ソーシャルスキルを学習させる前に、これからどのようなソーシャルスキルを学ぼうとしているのかを提示するとともに、それにより、そのスキルを身に付けることが対人関係においてどんなに大切なものであるかを教師が子どもに話したり、子どもたちと話し合ったりする活動のこと。
モデリング	教師は、ある対人場面でその場にふさわしいソーシャルスキルを実行してみせる。このような手本（モデル）を通して、子どもたちにそのスキルを学習させようとする技法のこと。
リハーサル	ロールプレイを用いて子どもたちに適切なソーシャルスキルを実行させること。
フィードバック	子どもが実行した標的スキルの出来映え（適切さ）について、どこがよかったかどうかすれどもっとよくなるか、などの情報を与えることである。
般化	学習したソーシャルスキルを定着させるために、自然場面でもできるようにすることである。

2 本実践における手だて設定の考え方

ソーシャルスキルトレーニングの一般的な手順が音楽の授業にそのまま当てはまるわけではないが、それぞれの手順の趣旨を踏まえて次のような手立てを打つことで、ソーシャルスキルの育成を図ることを試みた。

教示及びモデリング段階では、手本となる演奏を提示し、児童ら一人一人に自分が表したい音楽表現のイメージをもたせるために、教師の模範演奏を聴かせたり、鑑賞教材を用いたりすることで、児童により音楽のイメージをもたせる。

リハーサル段階では、それぞれがもったイメージを

表現するために必要な技能をグループで目標を共有しながら繰り返し目標に向かって練習を重ねていく。

フィードバック段階では、振り返りシートを用いながら自己評価及び相互評価を行い、ふさわしいソーシャルスキルができた児童の姿を共有させる。

般化については、今回の実践では音楽の授業内のみで行うため、省略することにする。

以上をまとめると、【表3】のようになる。

【表3】ソーシャルスキル育成手順を踏まえた手立て

段階	手立て
教示 モデリング	① 表したい音楽表現のイメージをもたせる。(イメージの醸成)
リハーサル	② 表現するための必要な技能（スキル）を身に付けるためのグループ活動を行う。(技能を伸ばすグループ活動)
フィードバック	③ 自己評価、相互評価を行う。(自己評価・相互評価)

3 研究の仮説

以上のことから本研究の仮説を次のように設定する。

研究の仮説
音楽の授業にソーシャルスキルの育成の手順を意識した主体的・協働的な活動を取り入れれば、ソーシャルスキルが育つであろう。

4 検証の方法

本実践の検証方法については、ソーシャルスキルトレーニングのアセスメント方法を活用することにした。

一般的なソーシャルスキルトレーニングのアセスメント方法には以下のような方法がある。

【表4】ソーシャルスキル育成のアセスメント方法

教師が自分で情報を得る方法	
面接法	教師が子ども一人一人と直接面接する方法。
行動観察法	子どもたちの行動を観察し、記録する方法。
ロールプレイ法	模擬的な場面を設定し、子どもたちに実際に対人反応を演じてもらう方法。
教師測定法	子どもたちの日常の様子やかかわりから評定する方法。
子ども本人から情報を得る方法	
自己評定尺度法	子どもに自己評定尺度を渡して回答してもらう方法。
自己監視法	日常の出来事を子ども本人に日記風に記録させる方法。

今回の実践では、この中から行動観察法と自己評定尺度法と自己監視法の考え方を検証方法に取り入れることにした。

行動観察法では、教師が活動中の児童の様子を記録し、目指す児童の姿を捉えていく。自己評定尺度法及

び自己監視法では、その考え方を取り入れた振り返りシートを用意し、児童らに毎時間授業内で振り返りシートを書かせて活動中におけるソーシャルスキルの自己評価をさせる。

また、実践前には、児童のソーシャルスキルの獲得状況を把握するために、埼玉県立総合教育センター(2006)の研究者によって開発された、「ソーシャル・スキル尺度」を参考に、児童の実態に合わせて修正したものを実施する。ソーシャルスキルは、自分の思考と感情を伝達する「主張」に関するスキルと、相手の思考と感情を理解する「配慮」に関するスキルとに大別される。対象児童が「主張」と「配慮」のスキルについて、どちらに偏りがあるかを調べ、伸ばすべきスキルである標的スキルを設定して実践に望む。さらに、音楽への興味関心について調査するための音楽に関するアンケートを行う。実践後にもこの2つのアンケートを行うことでその変容を図ることとする。

以上の手立てにより、これら全ての数値や記録を実践の前後と比較することによって、ソーシャルスキルの高まりを検証する。

5 研究構想図



IV 教師力向上実習Ⅰの実践と考察

1 実習の内容

(1) 教師力向上実習Ⅰの概要

教師力向上実習Ⅰでは、教師力向上実習Ⅱに向けた実践の前段階として、本研究での仮説とその手立てに有効性が見られるかどうかを見通すための位置づけとして実践を行った。

担当学級：第4学年A組
男子20名(内、特別支援学級在籍児童1名)女子14名 計34名
題材名：「拍の流れにのって、歌と打楽器を合わせてえんそうしよう」(全4時間)
使用教材：「いろんな木の実」

(2) 児童の実態

音楽に関するアンケートでは、「質問1 音楽の授業は好きですか。」という質問項目に対し、回答した33名のうち、31名が「とても好き」「少し好き」と答えていることから、ほとんどの児童が音楽に関心を持っており、音楽の授業や朝の歌の時間では、積極的に取り組む姿が見られる。

また、事前に「ソーシャル・スキル尺度」を行った結果、本学級の児童は「主張」に関するスキルが弱いことが分かった。日常場面においても、思いやりをもっている児童は多いが、勇気がなく、積極性の弱いところが見受けられる。本実践ではこれを踏まえて、打楽器をタイミングよく演奏できるような環境設定に努める必要があると考える。

(3) 具体的な標的スキル

本実践では、「本研究における音楽で養うソーシャルスキルの定義」と事前に行ったソーシャルスキルの獲得状況を踏まえて、「主張」を中心とした次のような児童の姿を目指すことにした。

- A. 友達とリズムを合わせるために、視線や行動で合図しようとする姿
- B. 自分や友達の思いや考えを伝えたり、聞いたりしながらタイミングよく演奏しようとする姿

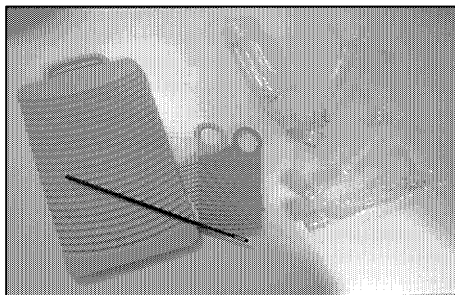
(4) 具体的な手立て

前述に示した「手立て設定の考え方」に基づき、教師力向上実習Ⅰでは具体的な手立てを次のように取り入れることとする。

- 手立て①ーア：模範演奏を聴かせる。
- 手立て①ーイ：教師がリズムを実際に示す。
- 手立て②ーア：4つのグループに分かれて歌の練習をさせる。
- 手立て②ーイ：4つのグループに分かれて打楽器の練習をさせる(十分な楽器の保障)。
- 手立て②ーウ：ペアグループで合奏の練習をさせる。(一人一役の保障)
- 手立て③ーア：振り返りシートを書かせる。

手立て③ーイ：互いの演奏を聴き合う。

本学級の児童は、楽器を演奏することに関心があるものの、日頃はリコーダー以外の楽器に触れることがほとんどない。備品の数にも限りがあることを踏まえ、授業環境の保障と今後の意欲を高めるために、本題材では本物の楽器に加え、【写真1】のように身近にあるものを活用した手作り楽器を扱うことにした(手立て②ーイ)。



【写真1】洗濯板のギロとペットボトルのマラカス

また、毎時間グループ活動を取り入れ、さらに一人一人にパートを与えることによって、全員に責任感をもたせるようにしながら、児童が音楽を通して友達とかわる場を設定した(手立て②ーウ)。

(5) 授業計画

時	主な活動内容	手立て
1	拍の流れにのって歌えるようにしよう ・リズム遊びをする。 ・「いろんな木の実」を聴く。 ・グループに分かれて歌を練習する。	①ーア ①ーイ ②ーア
2	拍の流れにのって、打楽器を演奏しよう ・リズム遊びをする。 ・グループに分かれて打楽器のリズムを練習する。	①ーイ ②ーイ
3	拍の流れにのって、3つのリズムを合わせよう ・リズム遊びをする。 ・グループに分かれて打楽器のリズムを練習する。	①ーイ ②ーイ
4	拍の流れにのって、歌と打楽器のリズムを合わせてえんそうしよう ・リズム遊びをする。 ・グループに分かれて合奏練習をする。 ・互いの音を聴き合って相互評価する。	①ーイ ②ーウ ③ーア ③ーイ

2 実際の手立てと有効性

(1) 手立て①(イメージの醸成)について

本題材のねらいは、楽曲の音色や拍の流れにのって歌と打楽器を合わせて演奏することである。しかし、扱う教材である「いろんな木の実」は西インド諸島に伝わるラテン系の音楽で児童にとってはなじみが薄い。したがって、導入にあたっては特徴的な曲の雰囲気や音色を味わわせることにより、明るく開放的な曲のイメージをもたせることが必要である。

そこで、本楽曲との出会いにあたっては、範唱CDを聴かせると同時に、教師が様々な楽器(ギロ、マラカス、クラベス)を演奏して見せた。

範唱CDを聴いた児童たちは、この曲のユーモラスな歌詞とリズムカルな曲調に引き込まれ、リズムに合わせて体を動かす姿が見られた。また、ギロやマラカスなど、初めて見る本物の楽器と音色に興味を示し、振り返りシートには、「ギロもたのしくなるリズムがあるからたのしくできた。」や「わたしは、ギロの楽器をえんそうしました。とてもきれいな音で、ほかの楽器ともえんそうすると、とってもきれいな音楽になりました。」などの記述が見られた。

(2) 手立て②(技能を伸ばすグループ活動)について

第3時に行った手立て②ーイ(グループによるパート練習)の中で、次時の合奏に向けてパートの役割分担をさせた【写真2】。



【写真2】体を動かしながら自己を表現する場面

その中で、欠席している児童がどの楽器をやりたいか意見を出し合ったり、希望者が重なった楽器を譲り合ったりする姿が見られた。女子児童Nは、「わたしは、はじめ一番かんたんなマラカスをやっていたけど、Sさんがやすみで何がやりたいかわからなくて、Sさんが来たときギロをやったらとってもたのしかった」と後の振り返りシートに記していた。本児は、活動前に教師へ「もしもパート分けで揉めてなかなか決まらなかつたらどうすればいいですか。」と質問していたが、実際にそのような場に遭遇したとき、本児は自分が譲るという選択をし、友達を思いやる姿を見ることができた。

また、第4時の発表会(②ーウ：ペアグループでの合奏練習)では、離れている友達とも目を合わせてリズムを合わせようとする姿が見られた。普段かかわりの少ない男子児童と女子児童ではあったが少人数集団にしたことによって、目指す具体的なスキルである「A.友達とリズムを合わせるために、視線や行動で合図しようとする姿」が見られた。

以上のことから、手立て②を取り入れることは児童が主体的に、児童らがそのような行動を取るべきか考えるきっかけとなることから有効的であると考えた。

(3) 手立て③(自己評価・相互評価)について

第4時に行った、手立て③ーアによる振り返りシートの記述には、グループ発表をさせる前にあらかじめ

教師が友達の良い姿を見つけるように声掛けを行っていたことから、何人かの児童が友達のよい姿を捉えて書き留めていた。

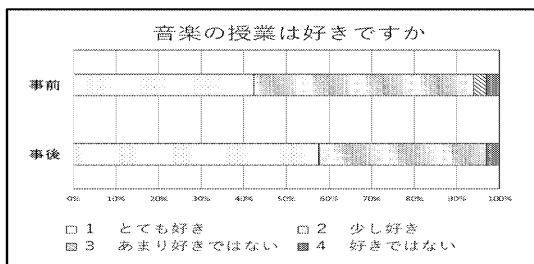
一方で、今回の実践では第4時でのみ振り返りシートを書かせたため、毎時間ごとの成長を視覚化することができなかった。そのため、児童ら自身も、自分の成長を捉えることはできなかったと考えられる。

3 教師力向上実習Ⅰの考察

(1) アンケート調査結果による考察

本実践を行った後、児童らに事前に行った音楽への興味関心に関するアンケートとソーシャルスキルの獲得状況に関する調査と同じものを実施した。

「質問1 音楽の授業は好きですか。」という項目においては、「とても好き」「少し好き」と答えた児童が31人から32人に増加した【グラフ1】。

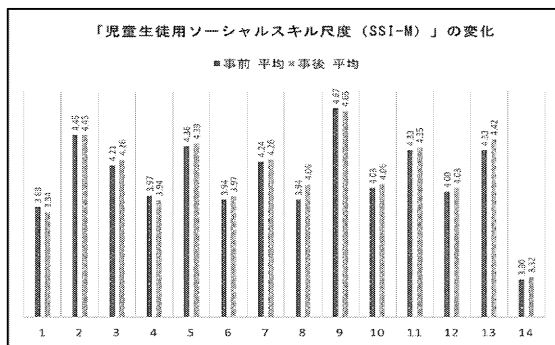


【グラフ1】「質問1 音楽の授業は好きですか」

中でも、「質問2 音楽の授業で好きなことは何ですか。」という項目に対して、「楽器をえんそうすること」と答えた児童の人数が33人中18人から26人に増えたことは、多くの子どもたちが楽器を演奏することに興味関心を高めたことを示している。

さらに、ワークシートには「ほかの楽器ともえんそうすると、とってもきれいな音楽になりました。」や、「みんなでリズムを合わせるのがむずかしかったです。でも楽しくやれてよかったです。」のような記述が見られ、友達と一緒に音楽を演奏する楽しさや面白さを子どもたちが実感できたことが分かった。

ソーシャルスキルについては、事前・事後に行った「ソーシャル・スキル尺度」の結果を、それぞれ学級全体の平均値と比較すると、【グラフ2】に示すとおり14項目中10項目が向上していた。互いに楽器のリズムを合わせて演奏するという経験がスキルの伸びにつながったと思われる。



【グラフ2】「ソーシャル・スキル尺度」の変化

(2) 行動観察による考察

今回取り入れたグループ活動では、上記のように、多くの児童が友達と楽器を演奏することへの興味・関心をもつことができた。しかし、ある児童の振り返りシートには、「みんなにあわせるのがむずかしかったです。楽器が苦手なのではずかしかったです。もうやりたくないと思いました。」との記述が見られた。本児童は真面目な性格であり、責任感も強いことから、自分が「こうしよう」と積極的に提案しているにもかかわらず、一部の児童が協力できず、うまい演奏ができなかったことが「もうやりたくない」という気持ちにさせてしまったのではないかと考える。よって、真の意味で、友達と一緒に音楽を演奏することの楽しさや面白さに気付かせるためには、子どもたちが一つの目標に向かって互いに高め合える環境をつくる必要があるということが分かった。その意味で今回は、児童らに「こんな演奏がしたい」という強い目標をもたせる手立てが不足していた。

(3) 教師力向上実習Ⅱに向けた改善策

教師力向上実習Ⅰの成果を踏まえ、教師力向上実習Ⅱでは次のような手立てを打つことにした。

ア 手立て①(イメージの醸成)について

教師力向上実習Ⅰでは、時間の都合上、鑑賞活動を行うことができなかった。その結果、児童の中で「こんな風に演奏したい」というイメージを十分にもたせることができなかった。よって、教師力向上実習Ⅱでは、より表現及び技能を高めるために、表現活動と鑑賞活動の一体化を図ることで鑑賞の時間を設定した。具体的には、合唱において自分のパートだけでなく、アルトのパートの音取りも行い、互いに聴き合わせるようにすることをねらうことにした。

イ 手立て②(技能を伸ばすグループ活動)について

音楽活動において、グループ活動を行うことは、ソーシャルスキルを高める上で有効であることが分かった。そこで、教師力向上実習Ⅱでは、授業時間を増やし、児童が主体的に活動できる時間を充実させるとともに、児童同士がかかわりをもてる時間を保証したい。また、児童らが同じ目標をもち、共通理解のもとで活動ができるように、グループごとに目標設定をさせることにした。

ウ 手立て③(自己評価・相互評価)について

教師力向上実習Ⅰでは、最後の授業で振り返りシートを児童に書かせ、それに基づいて児童の気持ちや考えを教師が把握し、授業評価をすることができた。しかし、手立ての有効性や児童の内面の変化を知るためには、毎時間に振り返りシートを導入する必要があると感じた。教師力向上実習Ⅱでは、振り返りシートを毎時間取り入れることにした。また、より評価の客観性を高めるために、ソーシャルスキルに関する事前・事後のアンケートを記名式で行わせることにした。

V 教師力向上実習Ⅱの実践と考察

1 実践の内容

(1) 教師力向上実習Ⅱの概要

担当学級：第6学年A組 27名
 (男子15名 女子12名)
 題材名：「心をこめて歌おう」(全6時間)
 使用教材：「あすという日が」

(2) 児童の実態

事前に行った音楽への興味関心に関するアンケート調査では、翌月に行われる「音楽会を楽しみにしていますか」という質問に対して、「とても楽しみ」「楽しみ」と答えた肯定的な回答が児童27人中21人、「あまり楽しみではない」「楽しみではない」と否定的に答えた児童は5人と、多くの児童が音楽会を楽しみにしていることが分かった。また、「あなたは合唱することが好きですか」という質問項目では、肯定的な回答が27人中21人で、否定的な回答が6人であり、音楽への関心は高い学級である。

また、事前に「ソーシャル・スキル尺度」調査を行った結果、本学級の児童は「配慮」に関するスキルが弱いことが分かった。日常場面においても、自分の考えを主張できる力がある反面、自分の考えを押し通そうとする姿が見られる。本実践ではこれを踏まえて、豊かな合唱にするためには、互いに聴き合うことが大切であるという、周囲への「配慮」に気付かせていきたいと考えた。

(3) 具体的な標的スキル

「本研究における音楽で養うソーシャルスキルの定義」と事前に行ったソーシャルスキルの獲得状況を踏まえて、「配慮」を中心とした次のような児童の姿を目指すことにした。

- A. 友達と声を合わせようとする姿
- B. 自分や友達の思いや考えを伝えたり聞いたりしながら活動する姿
- C. 合唱しながら同じパートの声や他のパートの声を聴き合う姿
- D. 友達の上手なところや頑張っているところを見付ける姿

(4) 具体的な手立て

前述に示した手立てを、教師力向上実習Ⅱでは次のように取り入れることにした。

手立て①ーア：少年の二重唱を聴かせる。
 手立て①ーイ：道徳の授業で具体的なイメージをもたせる。
 手立て②ーア：4つのグループに分かれてパート練習をさせる。
 手立て②ーイ：2つのグループに分かれて合唱練習をさせる。

手立て②ーウ：グループごとにめあてを設定する。
 手立て③ーア：毎時間、振り返りシートを書かせる。
 手立て③ーイ：互いの演奏を聴き合う。
 手立て③ーウ：演奏を録音して聴かせる。

(5) 授業計画

時	主な活動内容	手立て
1	アルトパートを歌えるようにしよう ・少年の重唱を鑑賞する。 ・アルトパートの音取りをする。	①ーア ③ーア
2	アルトパートを正しい音程で歌えるようにしよう ・アルトパート音取りをする。	③ーア
道徳	「あすという日が」が震災後に歌われた理由を考えよう ・歌詞の言葉に着目し、音楽表現へのイメージをより具体化させる。	①ーイ
3	歌い方を工夫して合唱しよう ・グループに分かれてパート練習をする。	②ーア ③ーア
4	強弱に気をつけて歌い方を工夫しよう ・グループに分かれてパート練習をする。 ・互いの音を聴き合って相互評価する。	②ーア ②ーウ ③ーア
5	言葉に合った歌い方を工夫しよう ・グループに分かれてパート練習をする。 ・互いの音を聴き合って相互評価する。	②ーア ②ーウ ③ーア ③ーイ
6	周りの音を聴きながらよりよい合唱に仕上げよう ・ペアグループで練習をする。 ・互いの演奏を聴き合って相互評価する。	②ーイ ②ーウ ③ーア ③ーウ

これまでに本学級の児童は既にソプラノパートを歌った経験がある。よって、本題材の導入ではアルトパートの音取りから始めた。また、歌詞の内容を考慮し、音楽の授業とは別に道徳の授業を行い、一人一人に音楽表現のイメージをもたせた。さらに、グループで共通の課題を設定したり、イメージを共有しながら練習したり、相互評価したりする場面を設定した。

2 実際の手立てと有効性

(1) 手立て①(イメージの醸成)について

第1時に行った、手立て①ーア(模範二重奏の試聴)を通して児童らは合唱することへのよさを感じるとともに、どうすればこのような美しい合唱ができるのかという課題意識をもつことができた。その後、実際にアルトパートを歌ってみた後の振り返りシートの記述には、ソプラノパートに慣れていて児童らにとって「アルトパートは難しかった」という記述が多く見

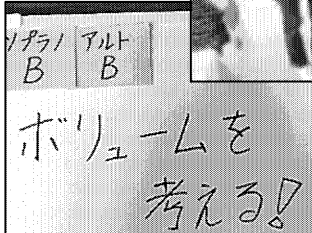
られた。その一方で、「アルトのほうがおもしろい」や「両方あってきれいになるから上も下も大切だ」といった記述も見られ、本手立てが活動への意欲付けとなったと考えられる。

また、道徳の授業（手立て①ーイ）では、本楽曲が東日本大震災後流行した理由について考えさせるとともに、歌詞に出てくる言葉に着目させ、自分が気に入った言葉とその理由について考えさせた。これにより、「被災者の人たちに向けて歌いたい」や、「聴いている人に伝わるように歌いたい」など、音楽表現へのイメージの具体化につながった。

(2) 手立て②(技能を伸ばすグループ活動)について

第3時から第5時にかけて、手立て②ーア（パート練習）を取り入れた活動を行った。はじめはパートリーダー及び副パートリーダーを中心にグループ活動に取り組む姿が見られたが、徐々にこれまでの授業を通してそれぞれが表現したいイメージや工夫したいところなど、各々の課題について意見を出し合いながら活動を進める姿が見られるようになった。第3時の振り返りシートの記述から、「Aくんがみんなをひっぱっていてよかった」、「Bちゃんがすごく高くてキレイな声だった」など、何人かの児童の名前が挙がるようになり、友達のよい姿を目標にして自分に取り入れようとする姿が徐々に増えていった。以上から、手立て②ーアが有効であったと考える。

また、第5時には、4つのグループで練習した後、ソプラノのAグループとアルトのAグループ、ソプラノのBグループとアルトのBグループを合体させ、学級を2グループに分けて練習させた。すると、女子児童の一人が、「アルトとソプラノのバランスが悪いからソプラノを抑えよう」と、グループに働きかける姿が見られた。このことは、楽譜に記されていたmfやfを直接的に受け取るのではなく、楽曲のイメージと自分たちの歌を照らし合わせながらよりよい表現になるように工夫しようとする姿である。これについては、手立て②ーイ（合唱練習）の他、手立て②ーウ（めあての設定）が有効であったと考えた【写真③】。



【写真③】グループめあての書いたホワイトボードとグループ活動の様子

(3) 手立て③(自己評価・相互評価)について

振り返りシートの記述を追っていくと、第1時、第2時の段階では授業の感想だけを書く児童がほとんどだったが、第3時以降になると、徐々に友達のよい姿を書き留めるようになっていった。また、それと同時によりよい表現にしていこうと自分ではどのような行動をとっていくべきなのかについても書くようになっていった。以下は児童が振り返りシートに記述したものの一例である。

(男子児童Cの第1時から第3時における記述の一部)

第1時: 10才の男の子たちの歌声がすごかったです。ぼくたちより、年下だし2人でぼくたち27人の声をこえることがとてもそんけいします。

第2時: (アルトとソプラノの)ちがいをつけていきたいです。

第3時: Aくんが引っばってくれるおかげで、よりよい歌が歌えそうです。でもA君にたよりばなしじゃダメなので、こえるとまでは言わないけど少しだけでもA君にちかづきたいです。

(女子児童Cの第1時から第6時における記述の一部)

第1時: アルトは難しかったです。あしたは、「あお空に手をのぼす～」のところをがんばりたいです。テレビの子が10才にみえないくらいじょうずでした。

第2時: 今日やってアルトが自分でもよくなった気がします！「あお空に手をのぼす～」のところは目標にしたいです。合唱でキレイに美しく歌いたいです。

第3時: 今日はソプラノで、グループでやってみて自分的にはもう少しできるのでは？と思いました。Aちゃんがすごく高くてキレイな声が出ていたのすごかったです。自分は声が低い音なので裏声で高い音を難しいのでがんばりたいです！次の目標をグループの子たちと、クリアできるようにがんばりたいです。

第4時: グループの目標で「キレイな裏声」にきめ、なるべくがんばりました。男子は歌わなかったり笑ったりしていたので、それも注意していきたいです。

第5時: 今日はA・Bに分かれて合唱して、おたがいの音が聞き合えたので良かったです。

第6時: 少し残念なところもあったけど（自分が）、がんばれてよかったです。

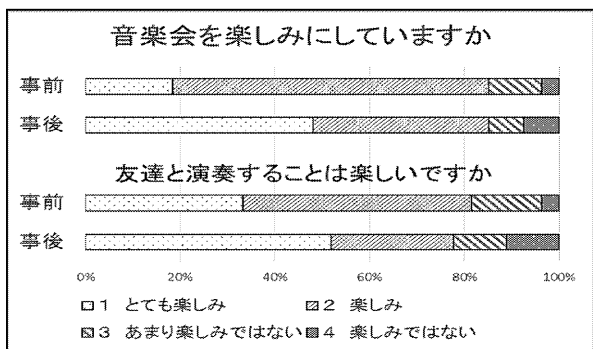
3 教師力向上実習Ⅱの考察

(1) アンケート調査結果による考察

ア 関心意欲態度の変化

本実践を行った後、児童らに事前に行った音楽への興味関心に関するアンケートとソーシャルスキルの獲得状況に関する調査と同じものを実施した。「質問1 音楽会を楽しみにしていますか。」と、「質問7 友達と演奏することが楽しいですか。」という質問項

目においては、【グラフ3】に示すようにそれぞれ肯定的な評価が9人から14人、5人から13人に増加した。一方で、否定的な回答も1人から3人、1人から2人に増加した。

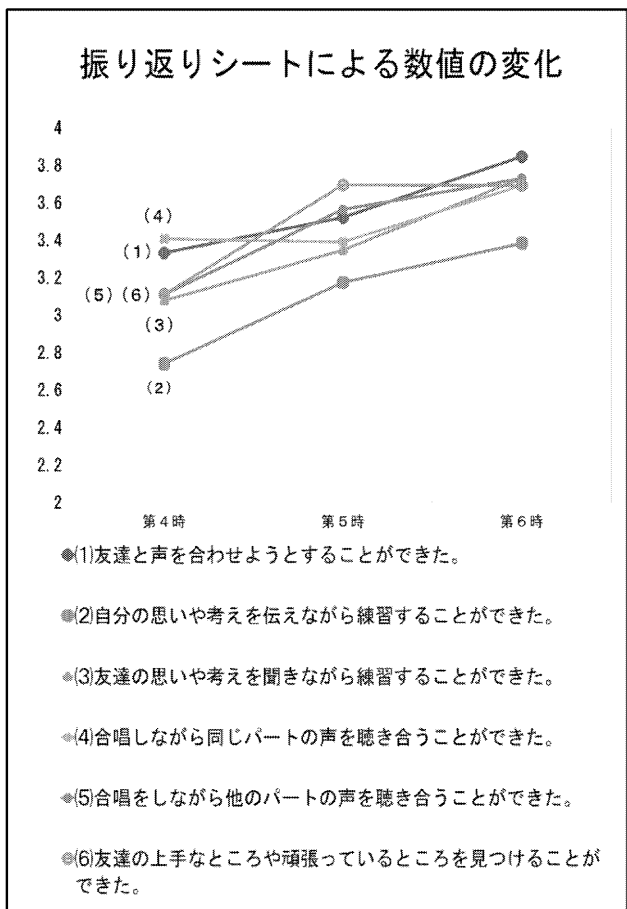


【グラフ3】興味・関心・意欲に関する調査結果の変化

いずれの質問項目においても、学級全体としてより音楽への関心が高まったことから、一連の手立てが有効に働いたと考える。一方で、否定的な回答をした児童が増えたのは、よりよい合唱を目指すという意味で自己の評価基準が高まったためと思われる。

イ 具体的な標的スキルの変化

また、第4時から第6時にかけては、音楽活動中のソーシャルスキルに関する自己評価として【グラフ4】に示すような6つの質問調査を行った。その結果は以下の通りである。



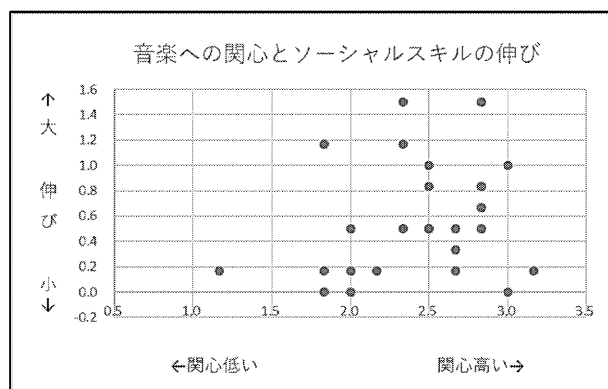
【グラフ4】振り返りシートによる数値の変化

このように、グループによる音楽活動を行った結果、

設定した標的スキルの高まりが見られた。

ウ 関心意欲態度と標的スキルの関係

しかしその一方で、日常は活発にソーシャルスキルを発揮できるにもかかわらず、音楽の活動には消極的で、本来もっている力をうまく発揮できていない児童も見られた。当該児童の振り返りシートは、「あまりできなかった」の選択が多く、音楽の関心が低かった。そこで、ソーシャルスキルの高まりと事前アンケートで調査した音楽への関心と相関関係を調べてみると【グラフ5】のようになった。相関係数は0.24で「弱い正の相関あり」である(0.2~0.4:「弱い正の相関あり」)。また、グラフの形状からは、関心が高い児童はソーシャルスキルの伸びにばらつきがあり、関心の低い児童はソーシャルスキルの伸びが期待できないことが読み取れた。

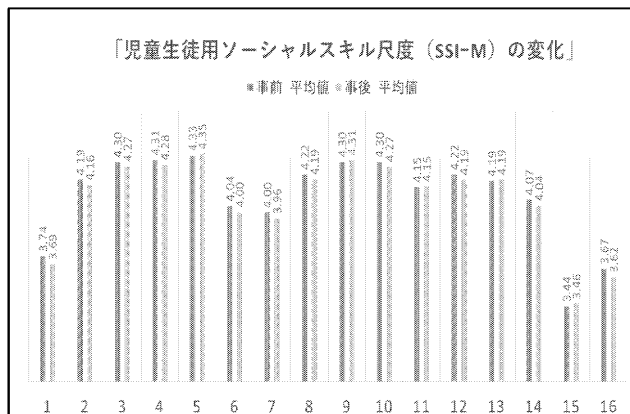


【グラフ5】音楽への関心とソーシャルスキルの伸び

このことは、音楽への関心が高いほど、ソーシャルスキルの高まりが強い傾向にあることを示している。音楽の授業でソーシャルスキルを高めるためには、音楽への関心をもっている必要があるということが分かった。

エ ソーシャルスキル尺度の変化

音楽の授業で伸ばしたソーシャルスキルが、他の学校生活にも生きて働くかどうかを調べるために、単元の実践前後で「ソーシャル・スキル尺度」の実施を行った。結果は次の通りである【グラフ6】。



【グラフ6】「ソーシャル・スキル尺度」の変化

16項目の質問のうち、3項目が上昇傾向、2項目

が横ばい、11項目が下降傾向となり、実践の前後で大きな変化は見られない。

一方で、前述のように音楽の授業で行った振り返りシートによるソーシャルスキルの数値については上がっていた(【グラフ4】)。このことから、【グラフ4】で伸長が見られたスキルには、汎用性がないということが言える。

(2) 行動観察による考察

行動観察からは、次のような児童の姿が見られた。

ア 非言語による意思疎通

日常生活では、友達とのかかわり方が分からず、友達付き合いが苦手な児童でも音楽の授業では「息を合わせる」ことで円滑に友達と一緒に活動する姿が見られた。音を合わせようとするコミュニケーションでは、本児のような友達とのかかわりをもちたいのに上手に言葉を選ぶことができなかつたり、距離感がつかめなかつたりする児童でも、動作や身振りによって「間」をつかむことでコミュニケーションを図ることができた。一方で、音楽活動で育成させるソーシャルスキルは、音楽活動におけるスキルに限定され、他の場面に汎用的なスキルが養われないことが課題である。

イ 協働して音楽活動に取り組む姿

毎時間、グループごとに本時の学習課題を踏まえた独自の目標を設定させたことで、グループの友達と共通理解を図った上で同じ目標に向かって活動に取り組む姿が見られた。しかし、音楽におけるソーシャルスキル育成は、音楽への興味関心による限界があるとも感じた。本実践では、音楽の授業内だけでソーシャルスキルを育てていくことを試みた。その結果、多くの児童が協働的な学びを実現できた一方で、もともとソーシャルスキルの能力が高い児童であっても、音楽への関心が低いと、ソーシャルスキルの伸びも低い傾向にあることが明らかになった。よって、音楽の授業内でソーシャルスキルを育てる場合、根底として音楽への関心をもっている必要があると感じた。

ウ 歌詞の意味をより深く考えるための道徳の時間との関連による成果

歌詞の意味や背景は、本来であれば音楽の時間を使って考えるべきであるが、今回扱った楽曲の教材性を生かすために、あえて道徳の時間を活用した。その結果、歌唱活動においてどのような気持ちを込めて歌いたいかを考えるだけでなく、生命の尊さについて考えたり、自己の生き方を振り返ったりすることで、自分がこれからどのような人生を歩んでいきたいのか「よりよく生きる喜び」について考えることができた。道徳で、歌詞に着目しながら本楽曲が流行した背景や一人一人の思いを明確にしたことで、活動の様子や振り返りシートから歌詞の意味を考えながら歌い方を工夫するなど、表現活動がより活発になった。

VI 研究の成果と課題

1 成果

実習Ⅰ・Ⅱでは、ソーシャルスキルの手順に則った手立てを取り入れて、主体的・協働的なグループ活動を行うことにより、その授業で育てるべきソーシャルスキル(標的スキル)を高めることができた。このことから、音楽の授業内で必要なソーシャルスキルを高めることは可能であることが分かった。

2 課題

音楽の授業内で育つソーシャルスキルは、主に音楽活動内でのみ発揮されるスキルであり、他の学校生活への汎用性があるとは言い難い。また、音楽の授業でソーシャルスキルを高める上においては、その根底として音楽への関心が必要であるということも分かった。したがって、より汎用性のあるソーシャルスキルを高めるためには、他の教科や学校生活全般において、同様の目的をもった教育活動を行っていくことが必要である。

引用文献

- (1) 杉村仁和子/石井秀宗/張一平/渡部洋(2007)『児童生徒用ソーシャルスキル尺度(SSI-M)研究報告書』pp.10
- (2) 小島律子(1997)『構成活動を中心とした音楽授業の分析による児童の音楽的発達の考察』風間書房 pp.242-244
- (3) 江口秀人(2001)『音楽は子どもに何を与えられるか:心の成長に欠かせない音楽教育』社団法人山ヤマハ楽振興会音楽研究所 pp.119
- (4) (3)と同じ、pp.216

参考文献

- ・阿部利彦/桂聖/盛山隆雄/平野次郎/清水由(2015)『教科で育てるソーシャルスキル40』明治図書
- ・上野一彦/岡田智(2006)『特別支援教育[実践]ソーシャルスキルマニュアル』明治図書
- ・大杉昭英(2017)『平成28年版 中央教育審議会答申 全文と読み解き解説』明治図書
- ・後藤聡(2012)『学びをつくる指導法の改善—音楽科を中心とした協同学習の実践—』山形大学大学院教育実践研究科年報(3) p68-75
- ・佐藤正二/相川充(2007)『実践! ソーシャルスキル教育 小学校』図書文化
- ・埼玉県立総合教育センター(2006)『ソーシャル・スキル・トレーニング(SST)に関する指導プログラムの開発』研究報告書 第307号
- ・文部科学省(2017)『小学校学習指導要領解説音楽編』東洋館出版社

【付記】

本研究を行うにあたり、約1年半にわたって連携協力校において、学校サポーター活動や教師力向上実習を行ってきました。研究に温かくご協力、ご指導くださった連携協力校の校長先生を始め、多くの先生方に大変感謝しております。ありがとうございました。

最後になりましたが、本実践報告をまとめるにあたってご指導をいただいた野木森広先生を始め、全ての先生方に心から感謝申し上げます。誠にありがとうございました。